



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	実践的・体験的学習から展開するキャリア教育を融合したこれからの高等学校商業教育に関する研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	高橋, 秀幸
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第13977号
Issue Date	2020-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78667
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hideyuki_Takahashi_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：高橋 秀幸

主査 准教授 亀野 淳
審査委員 副査 教授 上原 慎一
副査 教授 古谷 次郎（北星学園大学経済学部）
副査 准教授 古田 克利（関西外国語大学英語キャリア学部）

学位論文題名

実践的・体験的学習から展開するキャリア教育を融合した
これからの高等学校商業教育に関する研究

本論文は、商業高校で実施されている実践的・体験的学習について、実践の種類による効果の差異、効果継続性、実践的・体験的学習以外の商業科での取組みとの関係などについてアンケート調査をもとに定量的に明らかにするとともに、教員への聞き取り調査をもとに、実践的・体験的学習を指導する際の基本概念を明らかにし、これらを踏まえて、今後の高等学校商業教育の在り方を提示するというものである。

第1章では、学習指導要領、これまでの商業教育論、他の職業学科の状況、他国の後期中等教育やビジネス教育について整理し、日本の高等学校商業教育の特徴について概観した。特に、生徒数や学科数の減少幅が大きく、その理由として、生徒の普通科志向や学習指導要領改訂による専門性の希薄化、なかでも他学科と比べて商業科が産業界や地域の要請に対応した変化が不十分であった点に注目し、今後の商業教育の変化の必要性を示した。第2章では、高校の商業教育を修了した卒業生に対するアンケート調査を行い、社会に出て役立った取組みや今後力を入れて指導すべきものは、情報処理とビジネスマナーに関する科目であると認識しており、また、今後の商業教育に期待するものとしては、勉強や検定学習と実践的・体験的学習という2つの面の充実が求められていることを明らかにした。第3章では、商業高校における実践的・体験的学習としてインターンシップと販売実習に焦点をあて、これらに取り組んだ商業高校の在校生にアンケート調査を行い、「働くことにより社会を知る

こと」など両者に共通した効果がある一方、インターンシップでは進路希望の具体化、販売実習ではチームワーク醸成という特徴的な効果がみられ、それぞれの特徴を活かした取組みの対応、開発などが不可欠であることを明らかにした。第4章では、短期的な実践事例として1～2日の短期インターンシップを行っている商業高校の在校生に対して、事前、事後、卒業時の3時点でアンケート調査を行い、その効果継続性について分析を行った。その結果、体験直後に比べ1年後には肯定的な影響の多くは軽減されてしまうものの、「将来への展望」という効果については伸長がみられ、その効果は事前に進路が決まっていなかったと自覚している生徒に特徴的にみられた。第5章では、先進的な取組みを行っている商業高校の教員を対象に聞き取り調査を行い、その発話から指導の基本概念として、「学びの確認」「学びを深める」「つながり」「コミュニケーション」「責任感と自信」という5つのカテゴリーを抽出し、教員はこれらを意識して指導しているが、その内容については各校の進学者率によって異なることを明らかにした。終章では、各章の考察から、今後の商業教育に求められるのは勉強・学習面と実践面の両者の往還であり、また、商業教育とキャリア教育の融合であると、高等学校商業教育の中に設置すべきキャリア形成に関する科目の私案を提示した。

本論文の意義は、以下の2点である。第1の意義としては、高校の商業教育として実施されている実践的・体験的学習の効果を、在学中の3時点での継続した調査や卒業生調査をもとに定量的に把握した点である。こうした研究は近年実施されているものの本研究では以下の①～③の特徴的な結果が明らかになったことに意義がある。①効果の継続性は効果の内容や生徒の特徴により異なること、②インターンシップと販売実習の効果についてその共通点と相違点を分析したことにより実践的・体験的学習の多様性を明らかにしたこと、③教育的な観点からは否定的に捉えられている短期のインターンシップについて、その効果は限定的であるものの、一定の効果があることを定量的に明らかにしたことなどである。このように、高校の商業教育で実施されている実践的・体験的学習の効果と限界を具体的に明らかにしたことは教育現場の時間的制約の中で、各学校が取り組むべき方向性を示したものでありその意義は大きい。第2の意義としては、先進的な取組みを行っている商業高校の教員を対象とした聞き取り調査を行い、指導の基本概念として5つのカテゴリーを抽出し、さらにその相違を進学者率との関係で明らかにした点である。これら商業高校の先進的な取組みを分類し、その多様性を明確にした点は意義が大きい。これらに加え、こうした考察からキャリア形成に関する科目の私案を提示したことは今後の商業教育とキャリア教育のあり方を示したものであると評価できる。課題としては、実践的・体験的学習の効果を検証する中で生徒の学校生活の状況などの考察が不十分であることなどがあげられる。この点については今後の研究課題と判断した。

以上の成果と課題を確認したうえで、著者を北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格がある者と認める。